



## 「地方の時代」映像祭、新しい時代に

黒田 勇

関大は、これまで多くのジャーナリストを育ててきた。彼らが、その成果をもって「地方の時代」映像祭に戻ってくる。

そして、彼らの作品を現役の関大生とともに議論する。これに刺激を受けてまた新しいジャーナリストが育ち、社会と大学が連携し、知識と情報、経験が循環していく。

昨年11月に開催された「地方の時代」映像祭2008において、「夫はなぜ、死んだのか～過労死認定の厚い壁～」(毎日放送)でグランプリを受賞したのは、関西大学出身の奥田雅治氏だった。さらに優秀賞を受賞した「黒と白・名張毒ぶどう酒ワイン事件の闇」(東海テレビ)の齊藤潤一氏も本学卒業生である。審査にあたった私は、贈賞式の舞台上でそれを知り、主催団体として「エコひいき」をしたのではないという言葉が思わず口を衝いて出てしまうほどの喜びであった。

全国の放送局やCATV局、一般市民、学生、高校生によるドキュメンタリー作品のコンクールとして1980年川崎市で始まった「地方の時代」映像祭、2007年から本学で開催されるようになり、昨年11月は学園祭に合わせて開催された。この映像祭、主催として関西大学、日本放送協会、民放連が加わり、日本の放送界で大きな地位を占めている。

1980年、当時の神奈川県知事長洲一氏が提唱した「地方の時代」、それは東京に一極集中して発展してきた戦後日本に対する一つのオルタナティブの提案であった。当時の政治的文脈の中で大きなインパクトをもって迎えられた言葉だったが、それに呼応して、放送においても地方局が地域の課題を掘り起こすドキュメンタリー作品を顕彰しようとする「地方の時代」映像祭が川崎市で始まった。

それから30年、多メディア化、多チャンネル化、デジタル化が進展し、地方局の経営はますます苦しい。もともと地方局の理想は、放送による地域経済の活性化と地域文化の創造だった。NHKが全国あまねく情報を提供し、また共通文化を形成していくのに対し、民放各局は、各地域社会に貢献することを責務として出発したはずであった。ところが、東京キー局を中心としたネットワーク化が進み、地方局独自の放送文化を育てることが困難となってきた。そうしたなかで、ドキュメンタリーは、地方局が東京キー局に対抗できる唯一のジャンルでもある。

さて、地方の時代は新しい時代に入った。グローバル化が叫ばれる中、今回の映像祭でも、地方の放送局が地域に根を下ろしながらも、普遍的な人類の課題に取り組み、場合によっては海外まで取材を行っている。果敢に「越境」するドキュメンタリストが目立った。

さらに、さまざまなメディア技術、映像技術の発展は、もうひとつの「越境」も可能にしている。ドキュメンタリストは放送局に所属しなくても、その作品をさまざまなメディアを通して社会に語りかけることが可能になりつつある。それはジャーナリストに限らない。一般市民や学生など、誰もが映像を通して、自らの思いを伝えることもできる。この映像祭、そうした時代に呼応して、職業の枠を越境した人々の作品を議論する、そしてまた新しい映像ジャーナリズムのあり方をともに考えるフォーラムとしても期待されている。

この映像祭、これからも関大を中心に、さらに発展させていきたい取り組みである。

(社会学部教授)

### HEADLINE

#### 3面 検証 高校生が見た関西大学

「進学ブランド力調査」において、本学が関西エリアで「知名度」「興味度」「志願度」の全てで全体1位の高評価を得た。同調査の結果と概要を検証する。

特集

#### 4-5面

#### 学習する、発見する、成長する。 実体験を通じた学びの場

教室内の講義にとどまらず、実体験を通して学びの場を広げるケースが増えている。それらの活動から学生は何かを得ているのか。6件の取り組みを紹介する。

特集

#### 8面

#### 関大生の恋愛事情

まもなくバレンタインデー。学生生活を彩る「恋愛」にスポットをあて、たまたま交際の関大生から寄せられた声に学生広報スタッフが迫る。

特集(学生企画)

- ②面：外国語学部開設シンポジウムを開催
- ⑥面：奨学金制度、学生寮の案内
- ⑦面：織田信成さんが全日本初制覇

オープンキャンパスで学部説明のブースに座っている、受験生とそのご両親からよくもらう質問がある。大学では何が学べ、その結果、どういった職業に就けるのか、といった内容である。大学での学びが世の中に出てからどのように役立つのか、といったことを問われる。大学は学問をするところであり、就職予備校や専門学校ではない。それに以前とは違つて、出身学部や自己の専門分野にかかわらず、多種多様の職業に就くことができる。そう考える一方で、大学は社会に対してどのような役割を果たすべきなのか、また、社会に出て行く学生に何を持たせてやれるのだろうか、という思いもある。最近ひびきわたる不況の波がひしひしと感じられるようになり、学生諸君の就職活動にも暗い影を落としつつある。わが国では新卒での就職が生涯を通して大きなキャリアステップに大きな影響を及ぼす。大学が就職予備校ではないといえども、その動向には無関心ではいけない。▼就職活動で授業を休みますという伝言に、教員として割り切れない思いを抱きながらも、何とかうまいこと内定をもらってこいよと祈る今日この頃である。

(木村 康哲)



# 外国語学部開設記念シンポジウム

## 「考動する“ことば職人”たれ」



### 新設学部が高い関心 受験生らも多数聴講

昨年十二月十三日、「考動する“ことば職人”たれ」と題して、外国語学部開設記念シンポジウムが千里ホールで開催された。保護者対象の外国語学部説明会と個別相談会も同時開催された。当初は定員五百人を見込んでいたが、シンポジウムでは山本英一総勢八百人以上の事前申込者があり、実りある開設記念シンポジウムとなった。

当日は、河田博一学長と宇佐見太市学部長就任予定者の挨拶の後、最初に金田一秀徳客員教授の基調講演「日本語のコミュニケーション」が行われ、その後のシンポジウムでは山本英一客員教授が「ことば職人」として金田一秀徳客員教授と対談した。

「考動する“ことば職人”たれ」と題して、外国語学部開設記念シンポジウムが千里ホールで開催された。保護者対象の外国語学部説明会と個別相談会も同時開催された。当初は定員五百人を見込んでいたが、シンポジウムでは山本英一総勢八百人以上の事前申込者があり、実りある開設記念シンポジウムとなった。

#### パネリストから貴重な体験談

当日は、河田博一学長と宇佐見太市学部長就任予定者の挨拶の後、最初に金田一秀徳客員教授の基調講演「日本語のコミュニケーション」が行われ、その後のシンポジウムでは山本英一客員教授が「ことば職人」として金田一秀徳客員教授と対談した。

田一客員教授、中村正史「大田」客員教授、編纂長、玄学ランキンク、編纂長、玄幸子教授、田尻信子教授が登壇した。総合司会は長沢彰彦元朝日放送アナウンサーが担当した。

#### 外国語学部学部長就任予定者 宇佐見太市

「非常勤講師予定者が務めた。金田一客員教授の体面に即ち軽妙洒落な基調講演は、ことばのコミュニケーションの真髄に迫るものであり、聴衆の琴線に触れられた感じがしない。シンポジウムは、どこも「職人」として各界の第一線で活躍中のパネリストたちのそれぞれの持ち味が存分に発揮された充実した討論会となり、特に海外体験・コミュニケーションの持論も、その深い意義を認識することができた。」

#### 経済学部で国際化プログラムがスタート

昨年十二月十七日、経済学部国際化プログラムの事前授業、オーストラリア・アアア・アアア大学が開催された。当日は、北川勝彦教授、新藤隆壽教授および後藤藤太准教授による授業のほか、アアア大学と本学をネット接続するPOLYCOMシステム(ウェブ会議システム)を利用して、双方の遠隔授業が行われ、同大学からは、本プログラムを担当する二人の教員による授業が行われた。また、同大学からの交換留学生の

#### 大学トピックス

◆**守口市教育委員会と連携協力に関する協定書を締結**  
本学は、一月十一日に守口市における教育と本学における教育の充実・発展を図ることを目的に、守口市教育委員会と相互的人的・物的資源の交流・活用を推進するため、連携協力に関する協定書を締結した。主な連携内容は、①大学による中学生等を対象とした新たな学びの機会を提供すること、②大学生に小中学校等の教育現場を体験する機会を提供すること、③大学等の教育活動における地域の各種活動への支援を推進すること、④大学と小中学校等の教職員相互の交流・研修を促進すること、⑤「こころ」と「笑い」について、今後、学校インテグレーション等の連携事業を実施する予定である。本学は、一月十一日に「志半ばでコーチを辞任する兄に、少くもサッカークラブの役に立ちたい」との申し出により実現したものである。当日はジュニオール氏に感謝状を贈呈した後、ラモス氏による指導が行われた。

## D.W. ジョルゲンソン ハーバード大学教授に 名誉博士号を贈呈

一月十四日、第六回ソシオネットワーク戦略研究国際会議が本学で開催され、ハーバード大学教授のD.W. ジョルゲンソン氏に関西大学名誉博士号が贈呈された。名誉博士号の贈呈は十四日となる。

ジョルゲンソン氏は、「資本理論と投資行動」の数理モデルを世界で最初作成し、「一九七一年にアメリカ経済学会最高の賞であるジョン・ベイツ・フラー



### RCSSTフェローとして多大な功績

このたび、ソシオネットワーク戦略研究国際会議における基調講演者として再度来日したことを機会に、河田博一学長は、同氏の功績に対し敬意と感謝の意を表するとともに、名誉博士の称号をおよび記念メダルを贈呈した。(学長課)

### 客員教授 講演会 秋学期に20回開催

本学では、学術研究および教育水準の向上を図るため、本年度は46人の客員教授を招聘している。催学秋学期には下表のとおり、各学部、大学院などが主として客員教授の講演会を順次開催する。いずれも、本学学生をはじめとした多数の参加者の来場を得て、質疑応答なども活発に行われた。

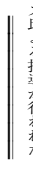
主催	日時	氏名・役職	テーマ
文学部	10月17日	辻原 登(作家)	歴史と冒険のシンクロニシティー —「ユガの福音書」の発見をめぐるつて—
	10月24日	村田 裕之(村田アソシエイツ代表、財社会開発研究センター理事長、東北大学特任教授)	これからの時代に求められる力とは? —学生時代に何をすべきか—
	11月27日	コソノヒロコ(ファッションデザイナー)	ファッション文化論
経済学部 大学院経済学研究科	12月9日	佐伯 啓思(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)	世界金融危機をもたらしたのは何か
	12月15日	大武健一郎(元国税庁長官)	租税社会学について
	11月21日	長谷川閑史(武田薬品工業代表取締役社長)	私の経営に対する考え方
政策創造学部	11月17日	橋渡 啓祐(佐賀県武雄市長)	地域再生へのシナリオ ~武雄市の戦略~
	12月8日	西川 一誠(福井県知事)	都市と地方を考える ~ふるさとの発想~
	12月17日	秋草 直之(富士通株式会社取締役)	ICTの変遷と富士通のチャレンジ
総合情報学部	10月30日	福島 邦彦(財フジシステム研究所客員研究員)	脳と視覚情報処理
大学院工学研究科	11月17日	中村 修二(カリフォルニア大学サンタバーバラ校材料物性工学部教授<青色発光ダイオードの開発>)	LEDの最先端技術の動向と日本の研究環境
外国語教育研究機構	10月13日	金田一秀徳(杏林大学教授)	日本語のコミュニケーション
	10月11日	角 和夫(阪急阪神ホールディングス代表取締役社長)	沿線価値向上を目指して
	11月26日	大西 又裕(ネット・ライフ企画取締役、元税務大学校主任教授)	希薄化する「公」概念と税制の再構築
会計専門職大学院	12月3日	平松 一夫(関西学院大学教授<前学長>)	会計基準をめぐる国際動向 —激動期におけるわが国会計基準のあり方
	12月17日	中村 平蔵(慶応義塾大学教授・グローバルセキュリティ研究所長、元総務大臣)	金融危機と日本の経済運営
	1月28日	園木 宏(あずさ監査法人代表社員)	今 監査の現場で何が起きているのか —公認会計士に求められる能力とは
学長室	11月26日	奥 正之(三井住友銀行頭取)	グローバル金融危機と金融ビジネスの潮流変化
学生センター	12月2日	水谷 修(水谷青少年問題研究所)	「いま、子どもたちは…」—いじめ、不登校、引きこもり、リストカット、自殺、薬物乱用・犯罪—



#### 伊設校 ニュース

◆**ラモス氏が関西大学北陽高校サッカークラブを指導**  
昨年十二月十七日、元日本代表のラモス瑠偉氏が北陽高校サッカークラブを指導するに当たり、ラモス氏の兄・ジュニオール氏が二十一年四月からサッカークラブのヘッドコーチを務めていたが、体調不良のためコーチを辞任するにあたり、ラモス氏に引き継ぎを依頼した。平成二十一年十二月三十日に死去。八十歳。

◆**昭和三十二年一橋大学経済学研究科修士課程修了**  
同大学経済学部主任、三十二年助教、四十二年教授、平成十三年三月定年退職。同年名誉教授。



#### 佐藤 博氏(さとう ひろし)元評議

氏に元評議の職を継承する見込みがあり、少くもサッカークラブの役に立ちたい」との申し出により実現したものである。当日はジュニオール氏に感謝状を贈呈した後、ラモス氏による指導が行われた。



リクルート社が発行している高等教育専門誌「カレッジマネジメント」第153号(2008年11月1日発行)に掲載された「進学ブランド力調査2008」において、本学は関西圏における「知名度」「興味度」「志願度」ランキングの全てにおいて第1位となり、全48項目にわたる個別イメージ調査(「活気がある感じがする」「学校が発展していく可能性がある」等)でも概ね高い評価を得ました。

今回はそれらの結果とともに、本学の現状について各セクションからのコメントと学生の声を紹介します。

**調査方法** 調査対象：関東、東海、関西の3エリアに在住の高校3年生  
 調査内容：①個別の大学の知名度・志願度 ②個別大学のイメージ  
 調査方法：進学情報誌「リクルート進学ブック」会員登録者による郵送調査  
 調査期間：2008年5月12日～26日  
 有効回答数：7,991件

# 検証 高校生が見た関西大学

## 高校生から絶大な支持、関西圏で「三冠」

近年の大学を取り巻く環境変化に伴い、大学の社会的役割も変わりつつあります。こうした状況にあつて、本学はさまざまな改革を行ってきました。学部編成においては、一昨年の政策創造学部の開設、工学部の理工系3学部への再編、本年4月の外国語学部の開設、そして来年には2つのキャンパス・学部の設置が予定(構想)されるなど、一連の大規模な改組・改革が、高校生に絶大な支持を得たものと見ています。もちろん、既存の学部においても、専修制の導入など、学生一人ひとりの「学び」の興味を引き出すカリキュラムの構築といった学部改革が、高校生に広く受け入れられているものと考えています。

また、各種の高大連携事業の取り組み、例えば各学部の教員による高校での出張講義、学校インターンシップを通じた在学生の各高校への派遣等により、高校生諸君が本学をより身近に感じてくれることも大きな要因かもしれません。さらに、キャンパス・アメニティの充実も重要な点です。オープンキャンパスや大学見学などの機会を通じ、本学を訪れる高校生の多くから、立地条件の良さ、キャンパスの広さ・緑の豊かさ、施設・設備の充実ぶりに圧倒され、この環境のなかでぜひ学びたいという感想が寄せられています。このほか、高橋大輔さん(大学院文学研究科M1)、織田信成さん(文4)をはじめとする在学生のさまざまな活躍も当然見逃せません。本学の潜在的なブランド力に加え、構成員一丸となった上述のような取り組みが、今回の結果に結びついたことを大変誇りに思っています。(入試広報課)

**知名度 No.1**  
**興味度 No.1**  
**志願度 No.1**



## 全体イメージ

- 伝統や実績がある → 6位
- 明るい → 2位
- 有名である → 4位
- 校風や雰囲気が良い → 3位

本学の学生たちは、各界で活躍する約32万人の卒業生が築いてきた伝統を受け継ぎ、明るく、気取らず、積極的な人が多いように感じます。今春には、学部がさらに増え11学部となり、より個性的な学生や先生も増えることでしょう。123年の歴史を持ち、自由な気風・満ちたキャンパスで、自分らしく、充実した4年間を過ごしてください。(広報課)

関西大学は、関西、なかでも大阪にある大学ということで、「元気があふ」とか「明るい」というイメージを持たれるのではないのでしょうか。確かに友だちにも楽しい人が多いですし、就職活動でも面接官から、「関西生って、活気があるね」と言われることもしばしば。学園祭がとて盛り上がるのもそのせいかもしれません。(社4・女性)

## キャンパスライフ

- 活気がある感じがする → 1位
- クラブ・サークル活動が盛んである → 4位
- 寮や奨学金が充実している → 7位
- 学生生活が楽しめる → 3位

本学には体育会、文化会、学術研究会、単独パート、同好会など150を超えるクラブやサークルがあります。これら以外にも学生が自主的に活動を行っているサークル団体を含めるとその総数は300以上に、どのクラブやサークルも活発な活動を行っており、なかには全国的に活動内容が知られているクラブも数多く存在します。全学生の半数以上が何らかのクラブやサークルに所属して活動しており、学生一人ひとりが充実したキャンパスライフを送ることができる大きな要因になっています。(学生センター)

クラブやサークルの人たちが新入生を勧誘しようと、入学式の会場周辺に進めないうらい人だかりができていたのには驚きました。結局、私は学園祭実行委員会に入り、超多忙ですが、充実した毎日を送っています。奨学金については、友だちから学生の3分の1が利用していると聞いたことがあります。(政策1・女性)

## 資格・就職

- 就職に有利である → 9位
- 資格取得に有利である → 10位
- 社会で役立つ力が身につく → 8位

入学時から卒業後のキャリアデザインをサポートする多彩なプログラムを充実させており、特にインターンシップについては、1997年に全国の総合大学に先駆けて導入。一般的なインターンシップに加えて国際インターンシップや学校インターンシップなど、大変充実した内容となっています。

また、難関国家試験や各種資格取得をしっかりと支援するエクステンション・リードセンター。そして、就職活動を行う学生には、各種ガイダンスや他大学では類を見ない企業数の学内企業セミナーを開催するなど、就職活動をしっかりとサポートしています。(キャリアセンター)

入学時にエクステンション・リードセンターの開講講座を知り、ファイナンス・プランナー講座を受講しました。講座では、生活に密着した資産運用や金融に関する知識を習得することができました。また、実務を担当する講師の経験談を聞くうちに、金融業界に興味を持つようになりました。キャリアセンター主催のガイダンスで早期から就職活動に備えたこともあり、銀行から内定をもらうことができました。現在は、TOEIC®コースを受講し、ビジネスに不可欠な英語力を習得中です。(経4・女性)

## 学習環境

- 教育内容のレベルが高い → 12位
- 学習設備や環境が整っている → 9位
- 勉強するのに良い環境である → 11位

より質の高い教育・研究の実施をめざし、日々学習環境の整備に努めています。例えば、昨年10月に発足した教育開発支援センターでは、さらなる教育の質向上のため教員の教育力向上に組織的に取り組んでいます。また、学生(授業支援SA)が授業の運営をサポートし、学生自らが授業の質向上に寄与しています。さらに、学舎・教室は順次建て替えを行って大型モニターやAVシステムなど最新の設備を備えるとともに、省エネルギーと快適さを兼ね備えた学習環境の整備をすすめています。(教務センター)

図書館をはじめとして、施設はきれいで充実している方だと思います。また、緑が多いキャンパスは快適で、広場で近所の子もたちが学生と一緒によくサッカーを楽しんだり、お年寄りが公開講座に参加したりと、ゆったりと開放的な雰囲気があります。ただ、大阪の都心から近いので、とても便利ですが、遊びの誘惑は多いかもしれません(笑)。(文3・男性)

国際的なセンスが身につく(圏外)  
 専門分野が深く学べる(圏外)

## ポイント はどーなの？

### 国際的センス

▶ 関西大学では2005年1月から、「Globalizing Kansai」構想に基づいて急速に国際化が進められています。その結果、当時11カ国17校であった学生交換協定校数は、2008年12月現在で20カ国45校に増加し、2009年度中には50校をめざして協定校拡大を進めています。また、現在500人以上の外国人留学生在籍しており、キャンパス内の国際化が進んでいます。さらに、国際部に昨秋、「国際コミュニティ:KUブリッジ」を設置し、メンバーである学生が主体となって、留学生の生活のサポートや日本人学生と留学生が交流するイベントなどの企画

を行っている、今後も留学生との交流がより活発になることが期待されています。(国際センター)

▶ 私は、夏休みにイギリスで大学主催の語学セミナーに参加し、さらに交換派遣留学で1年間アメリカの大学に留学しました。留学しようと思った理由は、関大のキャンパス内で経験した世界各国の留学生との交流を通して、海外の文化に興味を持ち、英語の必要性を強く感じたからです。就職活動では留学の経験をアピールして、希望していた会社に内定をいただくことができました。また、国際部のスタッフはみなさんとても親切で、いつも温かくサポートしてくれますよ。(文3・女性)

### 専門分野

▶ 関西大学の指導理念は「学の実化」。つまり、実際の社会で役立つ人材を育てることが目的です。幅広い教養を持ち、専門領域の知識をしっかりと身につけ、外国語能力を備え、情報機器を駆使することができ、問題を発見し解決することができる。そのような学生を社会に送り出すために、関西大学は柔軟なカリキュラムを展開しています。(広報課)

▶ 僕の所属する総合情報学部では、カリキュラムが「メディア情報系」「社会情報システム系」「コンピュータ・システム系」の3つに分かれていて、その枠を超え、興味のある科目を学ぶことができます。逆に、1つの分野に絞って深く学ぶこともできるなど、自分にあったアプローチができるのも魅力です。大学では高校生とは違って、目的や自主性を持ち、積極的に学ぶことが大切だと思います。(情1・男性)

[経済学演習] 担当:良永康平経済学部教授  
**キャンパスのごみを追跡・調査**  
 滝本 敏晴 さん



21 世紀は「環境の世紀」と言われるほど、世界中で注目されている環境問題。良永ゼミではそんな日々深刻さを増す環境問題について学んでおり、その中でも私たちは特に身近な環境問題であるごみ問題をテーマにしている。そこで、関西大学から排出されるごみに着目し、今まで大学が料金ベース(ごみ処理に年間約5億円もお金を提出)でしか把握していなかった大学のごみについて徹底調査を行った。

まず、収集運搬業者をはじめとする多くの企業による協力のもと、実際に足を運んでごみの行方を追った。リサイクル業者や最終処理業者を直接訪問することで、ごみ処理には数多くの業者が関わっていることや、関西大学だけでなく関西圏のごみ事情についても知ることができた。次に学内におけるごみ排出者である大学当局と生活協同組合に資料を求めて、千里山キャンパス内のごみ総排出量やごみの要素・成分について調査を行った。平成19年度においては年間約762tものごみが排出されており、ごみの内訳としては紙ごみが約7割を占めていることがわかった。

上記の調査を通してごみ減量に向けての問題点や改善点が見えてきた。具体的には、大学で適切な分別が行われていないために、本来なら可能なリサイクルが行われていないといったことが挙げられる。ごみ減量には、まず、ごみ減量に容易に取り組めるような環境が必要である。また、それと同時に学生・教職員の行動も必要不可欠である。不要なレジ袋は受け取らない、ごみはきちんと分別するなど心がけ次第ですぐに実行できることである。環境問題とは地球規模で問題の原因、影響、対策を考えなければならぬものであるが、改善すべきことは身近な所に数多く存在しているのだ。まさに「Think Globally, Act Locally」がかけがえのない地球を後世に残すために大学においても学生・教職員が一丸となってごみ減量に向けて行動すべきではないだろうか。

このように実際に現場に足を運び、現場の声を聞き知識を蓄えることで、私たち良永ゼミとしての独自の考えを創造することができた。またゼミナール関西ブロック大会や経済合同学内ゼミナール大会に参加し、自信を持ってその研究成果をプレゼンすることができた。こうして得た知識や経験はどれも有意義なものであり、私の人生において大きな糧となるものであろう。本だけで勉強するのではなく、現場で「生きた知識」を得て自ら学び考えることが大学生生活における一番の醍醐味であり財産であると改めて感じている。関西大学のごみに関する詳しい内容は、生活協同組合が発行している「書評」の130号2008・秋に掲載しており、関西圏のごみ事情などに関しては同誌131号2009・春に掲載する予定である。(経済学部3年次生)



[専門演習] 担当:長谷川伸商学部准教授  
**日本がおいてきた「忘れもの」**  
 廣田佐恵子 さん

彼女たちの笑顔は輝いていて、驚くほど明るい。そして、何より彼女たちは優しく、私は当初「中国で生活している人は水準の低い暮らしをしていて、可哀想だ」と考えていた。しかし、彼女たちと仕事や、文字通り寝食をともにして行く中で、現在の日本には失われつつある家族や周りとの絆、優しさや笑顔を彼女たちから感じた。現在の日本では家族内で口をきかなかつたり親子間で事件が起きたりするのに対して、昔は「向こう三軒両隣」という言葉があったように、家族だけでなく周りの人とも一緒に生活していた。その習慣が、現在の中国にはまだ存在し、私はそこに彼女たちの優しさや温かさを感じた。彼女たちの笑顔や優しさ、それは戦後の日本が急成長してきたときに置いてきた「忘れもの」なのかもしれない。金の余裕はあるが心の余裕がない日本には、これから「心の豊かさ」が必要だ。また中国は、貧しさゆえの勤働さやそこらから明るさの先に、人に優しくできる力があるのだと感じた。日本が置いてきた「忘れもの」をせすに、物質的に豊かになることが中国の課題となるだろう。

私がこのように考えるようになったのは、テクノセンターでたくさんの人やきっかけに出会ったからだ。そしてそのきっかけを与えてくれたのがゼミ活動だ。教室に閉じこもって頭だけで考えるのではなく、実際に自分の体を使って体験する。悩んだり、疲れたり、疲れたり、時には落ち込んだりもする。しかし、そうして得たことは、自分だけの経験として財産になり、私は成長し続けていく。(商学部3年次生)

日本は恵まれているか」という質問の答えに迷ったのは、2008年2月中国でのことだ。私は「国際協力や技術移転、人材育成の現場を歩く」というゼミのテーマのもと、中国の深圳にあるテクノセンターで約2週間のインターンシップに来ていた。テクノセンターとは、日本の中小企業が中国に進出するのをサポートする役割をもつ組織であり、安いMADE IN CHINA製品の舞台裏でもある。そこでは、私たちと同年かそれ以下のたくさんの女の子が親元を離れて働いている。長時間の労働に安い給料、ごみがあちこちに散らばっていて、専有スペースはベッド程度の12人部屋の寮、水のシャワーとパペツ1杯のお湯でお風呂。決して良くはない生活環境にもかかわらず、

[専門演習] 担当:藤岡伸一郎社会学部教授  
**出産とその後、現状を学び伝える**  
 植野 絵美 さん

安を感じている学生とのディスカッションは白熱したものとなった。「今、子どもができたら産む」と考える意見が多かったが、彼らは社会に対して育てていく段階の不安を覚えているようだった。また、このシンポジウムで伝え切れない内容を文章として取り上げ、より参加者の方に理解を深めていただくべく「ひのかん」を発行した。テーマは幅広いが、我々はこの雑誌で子どもを産み、育てる際に起こりうる社会問題(いじめ、児童虐待、学校教育など)について焦点を当て、その現状により関心を抱いてもらうことを目標としている。

今回のシンポジウムは全ての面においてゼロからのスタートであった。取材のために、吹田の保健所や赤ちゃんポスト「このりのゆりかご」を設立している熊本の慈恵病院を訪問…。現場の方が今まで知ることのなかった知識や現状を教えてくださいました。また金銭面においては関大前のお店1軒1軒に支援していただけたよう足を運んだ。苦戦することもあったけれど、温かく支援して下さる人々によって運営することができた。そしてより多くの人たちに伝えるため相談ののっていた協賛・後援企業や大学の広報課の人たち。人と人のつながりの大切さ、ありがたみを改めて痛感するきっかけとなったと思う。

私たちは今回のテーマをシンポジウムと共に終わらせるのではなく、これからさらに興味深い話をしていきたいと考えている。その成果を何らかの形でみなさんにまた伝えることができればいいと思う。(社会学部3年次生)



私 たち藤岡ゼミ3年次生では、11月29日に関西大学千里山キャンパス第3学舎ソリオAV大ホールでシンポジウムを開催した。自分たちが興味関心のあることについてとことん足を使って突き詰めた…。そんな思いが開催するきっかけとなった。「いま伝えるべき社会問題は何だろうか」とゼミ生で話し合いを重ねた結果が「あい」にまつわるものだった。年齢は大人でありながらも、子ども部分を持ち合わせる学生が、HIVや赤ちゃんポスト、代理母出産などといった問題に興味を持つことはとても重要だと考えた。そして「あいーい、子どもができたら」というテーマにたどり着いたのである。

当日はゼミ生が取材、撮影、編集を行った自主制作作品、そして兵庫県立伊川谷北高校制作の招待作品の上映、そして講演者に諏訪マタニティクリニック根津八絨院長を招き大学生とのパネルディスカッションを行った。不妊治療のひとつである、「代理母出産」の現場に携わっている院長の考えと子どもができることに不

# 実体験を通じた学びの場



学習する、



発見する、



成長する。

昨今の大学教育は、教室内での講義だけにとどまらず、従来の専門知識の蓄積に加えて、実体験を踏まえることにより培われる視点の涵養が求められているのが現状である。今回の特集では、たとえゼミ活動などで実体験を通して学びの場を広げている研究や授業等を取り上げ、活動の紹介とともに、何を学んだのか、学びの中から得た点は何かなどを学生に執筆してもらった。

[専門演習] 担当:黒上晴夫総合情報学部教授  
**教材開発の過程で「新しい視点」**  
 齋藤 麻貴 さん

私の所属する黒上ゼミでは、実験を通して学ぶことのできる場が充実している。その1つに、プロジェクト活動がある。プロジェクト活動は、さまざまな活動の中から、自分の興味に合わせて参加することができる。私は科学教材開発プロジェクトに属し、著作権フリーのハイビジョン教材を作成している。作成にあたっては、小学校と連携し、企画から絵コンテ、撮影、編集という一連の流れを学生が担当する。毎回のミーティングでメンバーと話し合い、試行錯誤しながら教材を作成している。で上がった教材の結果はもちろん、その工程も大切に、振り返りを行い改善することで成長していくことが大きな魅力である。月1回のマルチリソース研究会で作成状況を報告し、企業の方や現場の先生の意見を聞く場も設けられている。使ってくれる先生が目の前にいて、作成したものに意見がいただけるので、フィードバックもできる。これほど恵まれた環境で行える実習はないと感じている。また、定期的なポートフォリオ作成や、ウェブページによる活動公開も行っていく予定である。どのようにこれからのプロジェクト活動を進めていくかという展開についてもさまざまな可能性を秘めているため、みんなで考えていく楽しさがある。

私は、教育について興味を持っており、何かを作り上げていくことが好きである。もともと教材作成にあたっては、何もわからない一からのスタートであった。活動の中で少しずつであるが技術を習得し、徐々にできることが増えるにつれてさらに面白くなる。また、普段の生活から教材作成のネタについて考え、教材や映像を作成



者の観点から見ることができた。明らかに、このプロジェクト活動に参加する前とは、異なった視点で物事を見るようになったと実感している。

黒上ゼミは、自分がやりたいと思ったこと、興味を持ったことを実行できるような環境を用意してくれている。ほかに、オーストラリアへのスタディツアーやインターンシップもその例である。実体験は机上の学習だけでは得られない経験や自らの成長を実感することができる。このような貴重な経験はこれからの人生の中でも大きな糧となっていくだろう。ともに活動するメンバーや先輩、プロジェクトを支えてくれている先生や企業の方への感謝の気持ちを忘れずに、実体験での経験を活かして自分自身や活動を俯瞰的に見るのが重要であると考えている。(総合情報学部3年次生)

[専門演習] 担当:深井麗雄政策創造学部教授  
**社会貢献をテーマに考え、動く**  
 下垣 和美 さん

12月7日、阪神タイガースの岩田投手(本学卒業生)を招いて高槻市にある大阪医科大学で1型糖尿病の子どもたちを支援する2つの団体主催のクリスマス会が開かれた。患者とその家族や関係者を合わせて150人ほどが参加した。計画したのは2団体と、深井ゼミの学生4人である。

ゼミの目標は「社会への具体的な貢献を通じて、問題解決の方法とメディアを考える」だ。ゼミは、①ある自治体の「音楽と花」をテーマにした新事業の立案、②ある企業の100周年事業、③食品メーカーの学生向け新商品の開発、④1型糖尿病の子どもたちを支援する4人の「こども研」といった4グループに分かれる。4グループとも社会人並みの規律、スピードと徹底した独創性が求められる。

全員が名刺を持ち、自治体や企業の担当者とは合を重なる一方で、広汎な情報や先行事例を集める。ポイントは「一見、何の関係もない情報の隠れたつながりや意味をいかに引き出すか」だ。「エチオピアにある中国系油田へのケリラの攻撃と、日本海での越前クラゲの大繁殖には、なんの関係があるのか」。そういうことを私たちは必死に考える。作業は学生が自主的に進めるが、時に教授がアドバイスする。「こども研」では、夏前から2団体と交流を始め、サマーキャンプに参加した。子どもたちに接し、継続する支援のために何が必要か考えた。岩田投手は、高校時代に1型糖尿病を発症したが、関西大学を卒業後、阪神タイガースに入団しプロ野球選手として活躍している。「彼と直接ふれあう機会を作ることができれば、子どもたち



とその家族に喜んでもらえるのではないかと私たちは考えた。

時間との競争だったが、岩田投手の生い立ちを描いた紙芝居を作り、クリスマス会の当日、子どもたちに読み聞かせをしたり、一緒にゲームを楽しんだ。私が話したお母さんは、患者である息子が中学校で野球部に入学希望を出したが、学校側は1型糖尿病を理由に入学を見合わせた。しかし、医師が岩田投手を例に、部活動には問題ないと学校側に説明した結果、入学が認められたそうである。岩田さん自身、同じ病気の子どもたちと交流する機会を持ちたいと考えていたという話も聞いた。

クリスマス会の模様はテレビや新聞に取り上げられ、記事を読んだ岡山の病院から「紙芝居を貸して」との依頼があった。さまざまな橋渡しはできたが、改善すべき点もあった。スピードを重視した結果、グループ内の情報共有や企画の独創性に問題があった、と教授は指摘している。この経験を次に生かさないといけない。(政策創造学部2年次生)

[特別研究] 担当:梶川嘉延システム理工学部准教授  
**分野を越え、MRIの騒音低減**  
 平山諒太郎 さん

私が所属する情報工学研究室では、信号処理の技術を活用して、「音」に関わるさまざまな技術の研究に取り組んでいる。私のグループで行っている研究は、ANC(アクティブノイズコントロール)といわれる騒音に対して同振幅・逆位相の音波を干渉させて騒音を打ち消す技術の医療用MRI(人体の内部情報を画像化する装置)への応用である。滋賀医科大学医学部附属病院では、MRIを用いて取得した人体の断面画像を参照しつつ、リアルタイムで手術を行うシステムが導入されているが、MRIが非常に大きな騒音を発生するため、医師たちのコミュニケーションを阻害し、精神的ストレスの原因になっている。このような問題を解決するために、私たちはMRIへのANCの実用化に向けて日夜研究に取り組んでいる。

この研究活動を通じて、体験、実感したことがいくつもある。

1つ目は、他分野の研究者と共同研究を行うことの新鮮さを実感したことであった。医学と工学、専門分野は全く異なるが、興味深い話を聞くことができ刺激になった。また、どのような研究が行われているか間近で知ることができた。

2つ目は、改めて研究の醍醐味を認識できたことである。研究活動において、次々と生じる問題の解決策を考え、試行錯誤して成功したときの喜びが研究の醍醐味であると私は思っている。この共同研究も、当初はMRIの騒音を全く消すことができず、解決策の模索からスタートした。システム構成や制御アルゴリズム等に関する解決策について検討し、シミュレーションや実験を行うことで検証を繰り返した。



そして、徐々に騒音の低減効果を改善することができ、大きなやりがいを感じることができた。その効果を医師の方に実感してもらえたのは素直にうれしいことだった。

3つ目は、1つの目標に向かって仲間と協力し合い、やり遂げるという達成感を体験できたことである。私の研究グループの人数は3人と決して多いわけではないが、各自の役割分担を明確にし、一丸となって1つの研究に取り組むことで、MRIの騒音に特化したANCシステムの試作に成功することができた。このシステムを昨年9月12日に開催された「DSPS教育者会議」というデジタル信号処理の学会で発表、披露した。そこで、IEEE(米国電気電子学会)の賞を受賞することができたときには大きな達成感を感じるとともに自信につながった。(大学院工学研究科M1)





関大通信 第359号

平成21年(2009年)2月1日
大阪府吹田市山手町3-3-35
http://www.kansai-u.ac.jp/
次号は3月19日発行の予定です

寒い2月の温かなイベント、St. Valentine's Day.
この愛の誓いの日にちなんで、
学生生活を彩る「恋愛」にスポットをあて、
ただ今交際中の関大生にアンケートを実施。
出会いの場や結婚観など、気になる
「みんなの恋愛事情」を特集した。

特集
学生企画

関大生の恋愛事情
Love Stories at KU
恋愛事情



高槻キャンパスの夜景

Q:キャンパス内のおすすめのデートスポットは?

デートするなら「凧風館」か「高槻夜景」。

圧倒的に多かったのが、「千里山キャンパス凧風館(特に屋上庭園)」であり、次に多かったのが「高槻キャンパスの夜景」という結果であった。他には「芝生」や「図書館」が挙がっており、中には「社会学部の最上階から見える梅田周辺の夜景」がおすすめだという意見もあった。



屋上庭園から人形凧風館

Q:これまで最もうれしかったプレゼントは何ですか?

「車」か「キス」か。

予想どおりアクセサリー類が多かったが、「車」や「200万円の時計」といった高額なものも。一方、「彼女のブログの日記を印刷した本」、「クリスマスツリー点灯と同時の突然のキス」などドラマチックなものも見られた。われわれスタッフが印象深かったのは、「低反発枕」。実用的過ぎる?

Q:恋人のどこに最も惹かれていますか?

男は「優しく」、女は「可愛く」。

男女ともに、重視するのは「外見よりも性格」という結果であった。特徴として、女性は男性の「優しさ」、男性は女性の「可愛さ」に惹かれているようであった。ユニークな回答例では「全部です」。どうぞ、お幸せに。

『恋愛の社会学』の著者・谷本奈穂総合情報学部准教授に聞く

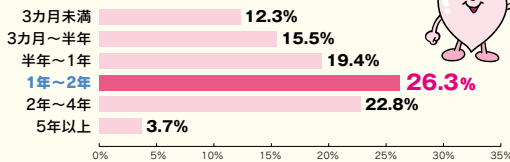
今回のアンケートでは、関大生がまじめで堅実な交際をしているという結果が出ていると思います。若者の交際といえば、さまざまな人と短いサイクルでつきあうかのようなマスメディアなどでの報道がありますが、関大生は、つきあいが1年以上に及ぶような堅実な交際をしている人が、52.8%にものぼっています。また、晩婚化・非婚化の危機が叫ばれているこの時代に、現在の恋人と結婚したい人が61.2%にのぼることも、まじめな交際をしていることの表れでしょう。それから、出会いの場として、クラブやサークルが機能していることも興味深い事象です。男女のつきあいにおいて、類似性もしくは相補性のどちらが重要なかという議論があります。似ているから相手に惹かれるのか、相手が自分にはないものを持っているから惹かれるのか、というものです。それから考えると関大生では類似性が重要であるようです。クラブやサークルでの出会いは、少なくとも共通の趣味をもっていることが、あらかじめ分かっています。趣味が同じ方が、話題が作りやすく、おつきあいに発展しやすいのかも。

【谷本奈穂准教授プロフィール】

大阪府出身。大阪大学人間科学部卒業、同大学院博士後期課程修了。博士(人間科学)。専門は文化社会学。研究対象は、雑誌の恋愛記事や少年マンガ、化粧品広告、フィットネスクラブなどに及び。

\*アンケートは昨年12月10日から18日の間、インフォメーションシステムを通じて回収。学部生・大学院生381人(男性140人、女性241人)から回答があった。

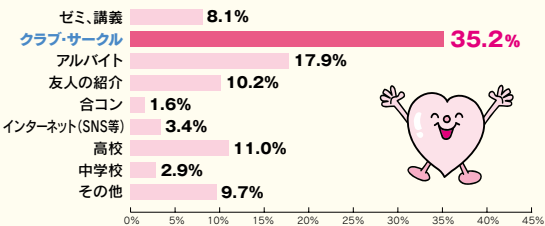
お付き合いしてどれくらいになりますか?



出会いの「春」はもうすぐ。

大学生になってから交際を始めたカップルが多いのか、交際期間1年未満の人が半数近くを占める。厳しい受験期を抜けると、そこには春が待っているかも…?

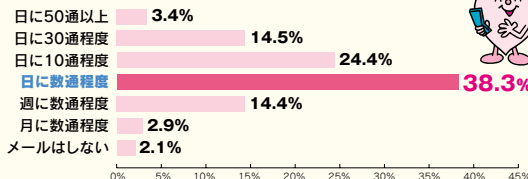
二人はどこで出会いましたか?



出会いを求めるなら「クラブ・サークル」へ!

約35%の人が「クラブ・サークル」で異性と出会っている。その数は、第2位の「アルバイト」の約2倍である。関西大学には300を超えるクラブやサークルがあり、それだけ出会いのチャンスも多いのかもしれない。また、時代を反映して、「インターネット(SNS等)」と回答した人が3.4%いることも見逃せない。

恋人にメールをどれくらい送りますか?



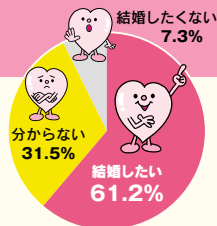
24時間つながっていたい?

「メールはしない」派が2.1%いるものの、付き合い年数や性別に関係なく、恋愛にもメールは不可欠ようだ。なかでも、3.4%が「日に50通以上」と回答。「日に30通程度」の14.5%をあわせると、2割近くの人が毎日かなりの数のメール交換をしていることになる。

現在の恋人と結婚したいと思いませんか?

互いを知るほどに…?

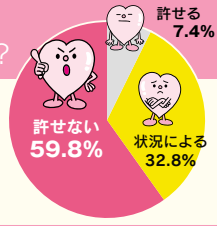
約6割の人が「現在の恋人と結婚したい」と回答している。だが、詳しく見ると、相手をよく知らないと思われる「交際期間3カ月未満」の17%に次いで、「交際期間5年以上」が14%と「結婚したくない」率が高くなっている。どうして?



恋人がほかの人とデートすることを許せますか?

関大生は寛大か。

「許せない」が59.8%と、「許せる」7.4%に比べて圧倒的に多い。ただし、「状況による」は32.8%。関大生は寛大なのか。



企画・編集: 学生広報スタッフ(50音順)
佐納愛(高2)・菅原直亮(情1)・高田輝之(法4)・平岡菜穂(情3)・深見さやか(法4)

誰もが「忙しい」と言う。やらなくてはならないことは山積みだが、皆、やりたいことは多々あるからである。本号で特集した「恋愛事情」もその一つかもしれない。このとき、われわれは往々にして「やりたいこと」を優先してしまっている。やらなくてはならないことは、少しだけ骨が折れるからである。その結果、より厳しい状況のなかで「やらなくてはならないこと」に直面することになってしまう。レポートや卒業論文で呻いたばかりのいま、多くの学生諸君が実感していることだ。やりたくはないこと、やらなくてはならないこと、優先順位を間違えない。この言葉を多忙な学生諸君へ、締め切り当日にこれを書いてる自分に贈りたい。(若林 雅哉)



編集後記

今月の表紙
黒田 勇(くろだ いさむ)教授
専門は、放送の社会学で主として「放送の社会学への影響」に関する研究を進めている。日本マス・コミュニケーション学会理事および毎日放送番組審議委員を務める。また、関西の放送文化の「復興」に心を砕いている。

